

ニューメキシコ州における先住民の被曝問題
玉山ともよ
(総研大)

ラグナ・プエブロ保留地内にあったウラン鉱山開発によって、地元先住民がどのような影響を受け彼らの暮らしがどのように変遷してきたのかを検証する。ジャックパイル鉱山は1953年から82年まで稼動していたウラン鉱山で、その特色は露天掘りにあり、近隣都市のグランツまで鉄道で鉱石が輸送されていた。当時多くの地元先住民が雇用され、貨幣経済が浸透するようになった。しかし70年代後半ウラン価格の暴落によって鉱山会社が倒産し鉱山が閉鎖されると、十分な補償を得ることができないまま多くの失業者が生み出され、保留地には十分に後処理が施されていない露天掘り跡が無数に残された。広大な鉱山跡地はフェンスで囲まれ簡単なセメント処理がなされただけで、現在も低レベルの放射能汚染が続いていると考えられる。実際癌などの罹患数も多く、住民の中にはそのことを伝えようと活動している者も見られるが、保留地政府が鉱山開発を推進した経緯もあり、組織だった活動は歓迎されていない。というのも鉱山労働が行われた際に被曝の危険性について十分に説明がなされなかったため、大規模な補償問題に発展し、保留地政府の責任が問われることになるからである。発表においては映像を用いて問題の概要等を報告する。